

授業づくりにおける指導案構想と授業対話

一学級における子どもの「居場所」づくり

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース

江口 小百合

実践報告書要旨

本研究は、授業の中での子ども同士あるいは教師と子どもの対話を通して子どもの居場所づくりを行いながら、これからの社会を生き抜く人材の育成を行うとともに、自身の授業力の向上につなげることを目的とし、その手段として授業実践を行い、授業前の指導案構想と授業中の対話の意義と有用性について検討してまとめたものである。

第1章では、授業実践を行う上での理論として「授業対話の重要性」と「指導案構想の重要性」について述べた。「授業対話の重要性」では「子ども同士の対話」と「教師と子どもの対話」、という2つの点について考察を行った。また、「指導案構想の重要性」では「教科内容」、「教材」、「学習の形態」という3つの点について考察を行った。

第2章・第3章は、第1章での考察を基に授業実践を行った記録である。

第2章では、小学校第5学年理科「台風と進路」の単元において授業実践を行った。本実践では、台風の特徴や規則性について雲画像などの気象情報を基に学習するとともに、単元のゴールとして、台風の被害やそれに対する対策をまとめた防災プレゼン保護者に発表する活動を行った。成果としては指導案構想において計画していた他者と学び合う活動の設定が実際の授業で効果を発揮している場面がみられたことであった。

第3章では、小学校第5学年理科「もののとけ方」の単元において授業実践を行った。本実践では、「とける」について考えたり、食塩の溶ける様子を観察することを通して「溶ける」という現象に興味を持つことをきっかけに、ものの溶け方についての学習を行った。成果としては意見の分化から、子どもたちが「溶ける」という現象に興味を持ち、もののとけ方について学習ができたことであった。「身の回りのとけるもの」や「食塩が水中でどのようにと溶けているのか」などの発問1つから様々な意見が出され、子どもたちが思考し他者へ自分の言葉で説明するような場面設定ができたことは本実践の成果であると考えられる。

授業実践についての第2章・第3章では、授業前の教材・授業研究、授業中、授業後の考察という3つに分けて述べている。